

「今、私の晴雨計は！⑤」

「シルクロードの夢は

半ばで……」③

平山征夫

スバシ故城は、夕暮れの中でひっそりと佇んでいた。亀茲国時代最大の仏教寺院の跡地で、クチャ川をはさんで東西の寺区があるが公開されているのは西のみだ。玄奘も大唐西域記の中でこのアーシュチャリア寺のことに触れている。千数百年を経て土に戻ろうとする遺跡に薄い西日が差しはじめ、我々以外誰もいないこの遺跡の寂寥感がシルクロードの歴史の経過を余計感じさせた。トルファンに行くため夜遅く乗った寝台車は、4人で一つのコ

ンパートメントだ。が、以前河西回廊で乗ったものと同じくカーテンがなく、プライバシーゼロだ。11時頃に消灯し、寝たかなと思いう間もなく起こされ、まだ暗い5時半にトルファンに到着した。トルファンは内陸の盆地にある都市で、海拔マイナス150mだから暑いことで有名、日中観光は控えなければならぬこともあるが、今年は異常気象で幸いそれほどではない。早速交河故城に向かった。名前の通り交差する二本の河に挟まれ南以外侵入が不可能という天然の要塞だ。紀元前二〜五世紀に築かれたが現存しているのは唐代のものが殆ど。建物を築き上げるというのではなく、建物の形に掘

り込む方法でできた街だ。かなり多くの人が住んでいたと思われる。日本でもそうだが古城は往年の栄華が偲ばれロマンに浸れる。次はトルファンの生命線ともいべき地下水路「カレーズ」の見物だ。何故生命線かというとトルファンでは年間降水量16mmに対し3000mmも蒸発するからだ。水源は天山山脈の雪解け水だから本当に綺麗だ。「カレーズというだけあって枯れそうもないし、加齢臭もないね!」、出たのはこの程度の洒落だった。枯れたのはこちらのネタの方かもしれない。

トルファンを象徴するのは火焰山だ。長年の侵食で山の地肌が炎のように見えることと、この地域が50度を超える猛暑になることからついた名前だ。西遊記でも悟空と牛魔王の闘いで有名な場所だ。我々は異常気象のお蔭で30度くらいの気温の中で火焰山を見ることが出来たのは良かったが、そのせいか山肌は赤くなく火焰の印象に乏しかった。40度を超えると陽炎で炎のように揺らぐのだそう。火焰山の麓にあるのが高昌古城だ。玄奘がインドに経典を集めに行く際に立ち寄った高昌国の都城のあったところだ。交河故城の三倍の広さだから、1万人以上の人は住んでいたのだろう。玄奘は引き止める熱心な仏教徒の王の要請を「帰りに必ず寄るので」と断ったが、16年後に立ち寄る

うとした時には唐に滅ぼされて高昌国はなかった。広大な故城の中を数年前までは、ロバ車で観光していたようだが今はカートだ。便利だがシルクロードの写真にはなりにくい。都城の遺跡の向こうには火焰山が望める。西暦六二九年、仏教を本当に学ぶには原経典に基づくべし、そして元の寺院で学ぶべしと考えた玄奘は「西域」行きを決心、しかし建国直後の唐からの許可は下りず、止む無く無断出国を覚悟したとガイドさんが解説してくれる。この厳しい氣候・地理条件に加え当時の政治・治安状況を考えると、本当にすごい決断だ。安全のため西域の商人たちに交って旅したりしているが、追剥に合ったりもしている。

信仰の力は本当にすごい。実際に今の時代に車で辿ってみてもその至難さはすぐわかる。この西域往きの覚悟の履歴に「六二九年、玄奘は孫悟空と出逢い西域行きを決断する」と入れたらと冗談半分に思った。故城を渡る風はこの日は爽やかだった。玄奘が訪れた時はどうだったのだろう。火焰山からの熱風が吹いていたのだろうか。帰りに館内のショップで備を買った。それまでの土産店には売ってなく「用（備）なしだ」などと言っていたが、ゲットして嬉しかった。買物のお礼にと出された甘いスイカは渴いた喉を潤して変らぬシルクロードの味がした。

この日の夕食はぶどう農家だ

った。ぶどう棚の下でこの家族と懇談もした。ぶどう園を拡大するのに土地の取得は出来るのか聞いてみた。「出来るけれど指定される土地は選択の余地がないうえ、かなりひどい土地ばかり」という。四人の子供さんの将来のことも聞いてみた。どこの親も子供には同じ思いを持っている。食事の後には民族ダンスを娘さん二人と二人の男の子のうち何故かひとりだけ参加で披露してくれた。子供は何処でも可愛い。この子らも大学受験は中国語でしか受けられないのだろうが、ウイグル人としてもその未来が良いものであって欲しいと、踊りを見ながら秘かに願った。

翌日は実質旅の最終日だ。トル

ファンからウルムチを經由、郊外の南山牧場を観光後上海に飛び、翌日日本に帰国という旅程だからだ。朝出発しようとするまで小雨が降っていた。道路が濡れている。此処では珍しい風景なのだろうが、誰も傘をさしていない。嬉しいからだという。訪れた南山牧場は、これまでの砂漠の風景から一転、アルプスのような山と草地、それに瀧という避暑地といった処だった。それよりもウルムチに向かう途中で見た大規模風力発電は興味深かった。強風で有名なこの地域にオランダの企業と協同で造ったものだ。規模に圧倒されながら良く見ると半分くらいしか動いていない。聞けば中国の経済事情で需要が伸びていな

いことがあるが、最大の要因は需  
要地までの送電距離が長すぎて  
採算がとれないのだそうだ。これ  
も開発を急ぎ過ぎた失敗例なの  
だろう。

何度来ても大きすぎて中国の  
全容は掴めないし、どんどん変わ  
っても行く。一方で日本に倍する  
ような五千年の長い歴史もある。  
それらが魅力となって捉えて離  
さない。その中でも私が最もロマ  
ンを感じてきたのが「シルクロー  
ド」だ。古くからあれだけ長い距  
離を結び、東西の文明が行き交っ  
た。色々な民も行き交った。ジン  
ギスハーンやチムールの支配な  
ど沢山の血が流れたこともあっ  
たが、それでも人々は隊商を組ん  
で駱駝に揺られながら文明とい

う物資を運んだ。人種のるつぼは  
異なる言葉を交わしながら繋が  
ることで繁栄してきた。シルクロー  
ドに憧れてきたのは「人種や文  
化がるつぼのように交差」し、そ  
こにはお互いを認める文化があ  
ったからだ。この地域が中国の支  
配下に入ったのは清国の時代で  
シルクロードの歴史から見れば  
最近のことだ。

そのシルクロードは、今や変革  
の嵐の中にあった。漢族の新疆地  
区への大量移住はその最大要因  
だ。街のいたるところで習近平氏  
とウイグルの人たちが談笑する  
大きなパネルと「富強 民主 和  
諧 法治 愛国」などのスローガ  
ンが架かっていた。まるで実態が  
そうでないことを強調している

ように見えて仕方なかった。習政  
府による「一帯一路」は新たなシ  
ルクロード建設との触れ込みだ  
が、それはどんなシルクロードだ  
ろうか。人種のるつぼの交差は認  
められるのだろうか。シルクロー  
ドの全ての民のためのものだろ  
うか。帰ってきてから検問やウイ  
グル対策の状況等思い出しなが  
ら、こんなことを考えているうち、  
この随筆（旅日記？）のタイトル  
は「シルクロードの夢は半ばで」  
となった。抱き続けたシルクロー  
ドの夢は半ばまでしか見ていな  
い心境なのだ。そこで川柳が一句  
出来た。  
“ 夢半ば 醒めて 眺める ス  
ローガン ”

（平成30年8月9日）

